神戸シルバー大学院研究報告　No.４０

コットンから見た日本の衣と農

ＳＧＳ１４期　　藤本　明美

目次

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2. 衣服の国内自給率の話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

3. コットンの歴史

①いつ頃、日本に伝来？・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

②イギリスの影響とは？・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

③日本の産業革命はいつ？・・・・・・・・・・・・・・・・・6

④コットンの歴史の曲がり角・・・・・・・・・・・・・・・・8

4. フィールドワーク報告

①糸紡ぎ体験（丹波布伝承館・丹波市）・・・・・・・・・・9

②サムライ自家製ジーンズプロジェクト・篠山市真南条・１１

③３６５コットン（サブロクコットン）・西脇市・・・・・１３

④かこっとんファームプロジェクト・加古川市・・・・・１５

⑤福島オーガニックコットンプロジェクト・福島県いわき市・・・１７

⑥全国コットンサミット・加古川市・・・・・・・・・・２１

5．まとめ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５

6．おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８

7．参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９

１．はじめに

何故、私がコットンの話を詳しく調べてみたいと思うようになったのかは、シルバーカレッジの生環１７期生として経験したグループ学習を抜きには語れない。２０１２年春、選んだテーマは「衣服と環境～古着の行方を追いかけて」だった。そのテーマを選ぶキッカケとなったのは、日本環境設計㈱というベンチャー企業が「古着の綿繊維からバイオエタノールを製造する技術」を作り出したという新聞記事。当時、フィールドワークの為に愛媛県にある日本環境設計㈱の今治工場まで、メンバーと訪れたことは懐かしい思い出である。その折に担当者から受けた説明の中で「繊維製品の素材の６割がコットン」という話はとても印象に残った。衣服の環境問題に占めるコットンの重要性を改めて感じた。

もうひとつ印象に残っているのは、福島県いわき市に本拠地を置く、ＮＰＯ法人ザ・ピープルの吉田恵美子理事長のこと。全国的な古着再資源化率は現在も１０～１３％であるが、いわき市においては驚異の９０％を達成している。それを可能にしたのはＮＰＯ法人ザ・ピープルの吉田理事長を中心とした、数十年に及ぶ地道な日常活動である。日本国内で繊維リサイクル問題を学習する場合、吉田理事長の名前は当たり前のように何処からでも出てくるほどの存在だ。その彼女が２０１１年の福島第一原発事故を契機に、いわき市内の耕作放棄地でコットン栽培を始めたというニュースには、正直驚かされた。環境活動家として古着回収だけに止まらない活動をされていたのは知っていたが、いま何故、コットン栽培？と思った。そのコットン畑を実際に見てみたい、とも思った。

また私自身、カレッジを２０１３年３月に卒業して、生環１１期でもあるＳＧＳ５期の村尾三樹雄さんの主宰する、「米つくろう会」に入会したこともコットンへの関心に繋がっていった。入会後、毎週火曜日には垂水区の柚耶の郷圃場、木曜日には篠山市の真南条営農組合の圃場に通う日常生活を送ることになった。真南条圃場に広がる田園風景には素直に癒されたが、慣れてくると高齢化のために休耕田にせざるを得ない地元の事情もじわじわと見えてきた。そうした中でサムライジーンズというアパレルメーカーが、２０１２年から真南条営農組合の管理する圃場で始めていたコットン栽培畑に強く興味を持った。いま、何故コットン栽培なのか？と。和綿にこだわっていること、オーガニックにこだわっていること、ＮＰＯ法人ザ・ピープルの取り組みと同じだった。

コットンを調べていくことは、繊維リサイクルの問題だけでなく、私たちの衣服を取り巻く環境を見直してみる機会になる気がした。まずはその国内自給率から調べてみることにした。レポート上の言葉の問題であるが、日本語の「綿」はワタともメンとも読め、「棉」は収穫して種を取るまでの言葉、それ以降は「綿」と書く。また「真綿」の素材は絹であるので紛らわしく、このレポートでは「コットン」と書くことにした。

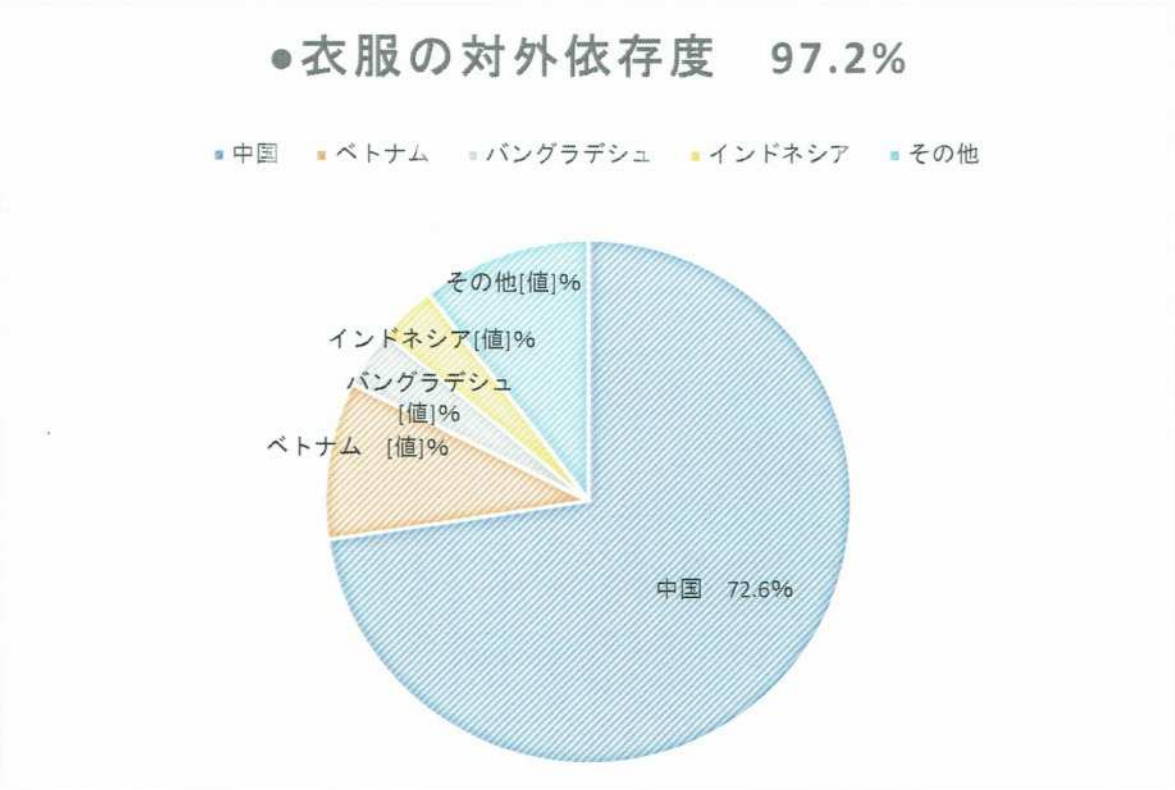
２．衣服の国内自給率の話

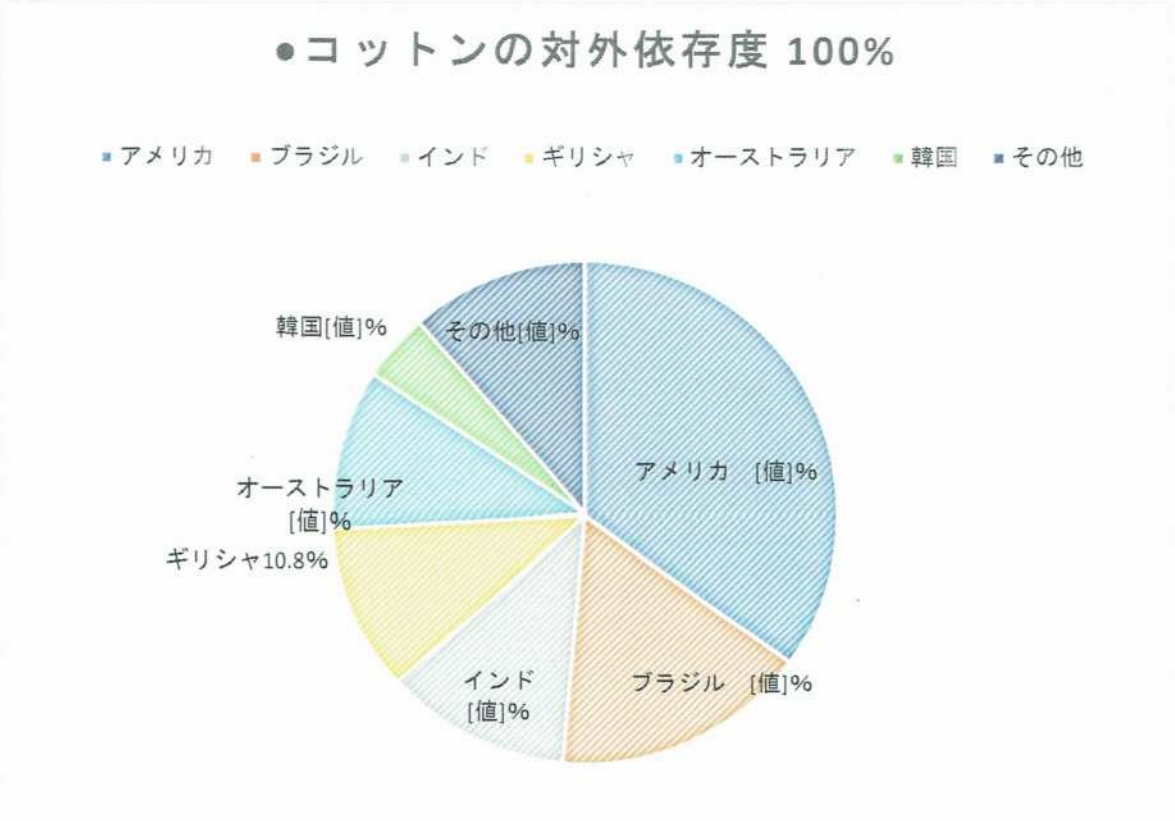
２０１５年５月に神戸ファッション美術館で「日本の産地とこれからのファッションデザイン」というテーマのセミナーがあった。以前からこの美術館の催しに定期的に参加しており、楽しみに話を聞きに行った。講師はファッションレポーターの宮浦晋哉さんと、播州織の織元である島田製織㈱のテキスタイルデザイナーの小野圭耶（かや）さん。お二人の話の中で衣服の国内自給率２％という数字にひっかかりを感じ「何をベースにした数字ですか？」と質問すると「流通ベースです」という回答。カレッジでのグループ学習中、廃棄物資源循環学会の機関紙の中で点数ベース６％という数字に驚いたことを思い出した。２００６年度の中小企業整備機構データからの数字だった。数量ベース、点数ベース、金額ベース・・・と微妙に数字は違ってくるのかもしれないが、どれも０％に近いということだけは確かだ。

しかし、今回のレポートを書くに当たり、データを出す必要性を感じてお決まりのＮＥＴ検索をしてみた。財務省統計ＨＰにもアクセスしてみたが、私の手には負えない数字の羅列だった。経済産業省は衣服の自給率を計算すること自体を、無意味と考えたのかと勘繰りたくなった。それというのも２０１６年９月にＫＳＣ・生環コース１年生の授業「衣服のリサイクルとその課題」を聴講させていただいたが、講師の木村照夫先生（京都工芸繊維大学名誉教授）の講義の中で『最後に残る繊維リサイクル法が中々出来ないのは、輸入品ばかりの古着を自国の税金でリサイクルすることの矛盾を政府の担当者は考えているから』と指摘されていたからだ。ちなみに木村先生の仰っていた自給率は４％である。

ただ一か所だけ明確に数字を提示していたサイトがあった。帝国書院ＨＰ統計資料「日本のアパレル市場と輸入品概況　２０１６」である。帝国書院は１９１７年に創立された小・中・高校向けの教科書出版会社である。統計資料は財務省データから作成したとのこと。信用しても良いのではないかと思った。ＨＰにアクセスすると対外依存度という名目で衣服・コットン・羊毛の輸入国比率が記載されてあった。その詳細は次ページにグラフで表示した。衣服の対外依存度は９７.２％、コットンの対外依存度は１００％、また羊毛の対外依存度も１００％である。つまり、衣服の自給率は２.８％、コットンの自給率は０％、羊毛の自給率も０％という結果だった。なんともため息の出る数字である。

確かにファッション美術館セミナーの折、播州織デザイナーの小野さんに『コットン糸はどこからの仕入れですか？』と質問した時『一般的にはアメリカからの輸入糸が多いですが、細糸はエジプト綿、インド綿を使います』という回答だった。播州織・・・か？産地の実態はそういうことなのだと納得した。西脇市出身の若きデザイナーである彼女は産地の実態に明確な問題意識を持っていた。市内の休耕田で仲間たちとコットン栽培を既に始めていた。そのプロジェクト名が、３６５コットン（サブロクコットン）である。





▲帝国書院ＨＰ統計資料「日本のアパレル市場と輸入品概況２０１６年」

３．コットンの歴史

前項においては、コットンの対外依存度が１００％（統計上）、つまりコットンの国内自給率は０％という数字を改めて確認した。私自身が思いつくままに書き連ねてみても、日本にはかつて、会津木綿、三河木綿、松阪木綿、河内木綿、姫路木綿、倉吉絣、伊予絣、久留米絣・・・等々、数多くのコットン産地が全国に点在していた。江戸時代には絹織物の「呉服」に対し綿織物は「太物」と呼ばれ、庶民の衣服として、また商品として流通し経済を支えていた。しかし、現代の日本で何故コットンは栽培されなくなったのか？その一点を、深く掘り下げて知りたいと思った。その為には、コットンの歴史を辿っていくのが早道だと考えるに至った。

①いつ頃、日本に伝来？

「木綿以前の事」の中で柳田国男は『単純なる昔の日本人は、木綿を用いぬとすれば麻布より他に、肌につけるものは持ち合わせていなかった。木綿の若い人たちに好ましかった点は、新たに流行してきたものというほかに、なお少なくとも二つはあった。第一に肌ざわり（中略）第二には色々の染めが容易なこと』と述べている。弥生時代には既に製法が伝わったとされる絹繊維が、平安時代には貴族の衣服として登場しているのは源氏物語等で知識として知っている。では、木綿以前の庶民の衣服の中心は？というと麻繊維だった。夏の衣服としては放熱性が高く、強度もあり植物としての成長も早い。しかしながら麻の衣服は、四季のある日本では夏季ならともかく冬季には、昔の日本人の我慢強さをもってしても何枚重ねても相当に寒かったと考えられる。

「日本後記」によると、綿種が最初に日本に伝来したのは８世紀末、三河地方に漂着した崑崙人（インド人）が持ち込んだとされているが、この綿種が定着することはなかった。その後は中国や朝鮮からの綿布の輸入に頼るのみで、絹布と同じく綿布も高級品であった。１６世紀に入り三河地方を中心に栽培が一般化してくると、布地としての抜群の性能が認識されることになった。つまり柳田国男が指摘するところの肌ざわり、発色の良さである。それにコットン素材には軽さ、吸水性、麻繊維にはない保温性もある。戦国時代の兵衣・幔幕（まんまく・軍陣などで周りを囲む横断幕）・火縄材料として当時の幕府・大名たちがこぞって入手しようとしたことは充分に想像できる。

戦国時代を舞台にしたＮＨＫ大河ドラマ「おんな城主　直虎」を視聴していて、第１６回目の放送に綿毛を栽培するという話が出てくるが、浜松木綿のことだと類推して面白くなった。領地内の産業振興の為、試しに三河から持ち込んだ綿種を育てる話である。種まきしたものの中々発芽しない・・・諦めかけた頃にやっと発芽し、結局気温の問題だった

と気づく展開。確かに綿種の発芽温度は２０℃以上であり、現在では、５月上旬の播種時期が適当とされている。７月頃から次々に開花、コットンボールが弾け始めるのは９月以降、１１月が最盛期となる。その為、日本においては豪雪地帯の東北、北海道には昔からのコットン産地が存在しない。

日本では福島県（会津木綿の産地）を北限として近畿、四国、九州まで幅広くコットンが栽培されていた。コットンの栽培には降霜のない長い期間と６００ｍｍ～１２００ｍｍの降水量が必要とされる。この条件を満たすのは熱帯・亜熱帯地域であり、世界のコットン栽培地がインド、ブラジル、エジプト、そしてアメリカ、中国の南部地方となっていることからも納得できる。つまり緯度の高い地域ではコットン栽培はできない。コットンの歴史に最も影響を与えた国・イギリスでは、気候の問題から栽培できないということである。バーバリー・ロンドン等に代表される毛織物はイギリスの風土を生かした衣服であるが、羊毛を原料とした毛織物生産は、湿度の高い日本では不適なのは余談だが。

②イギリスの影響とは？

１８世紀半ばから１９世紀初頭にかけてイギリスで起こった産業革命は、コットンの紡績機械を発明したことから始まった。紀元前二千年頃のインダス文明時には既にコットンが栽培されていたインド。その国内で紡ぎだされる綿糸は細く長く、艶があり手織りされた綿布は、「キャラコ」と呼ばれて、輸出先のヨーロッパ各地で珍重された商品だった。現在でもインド産のコットンストールを手にすると、細糸で織り出された柔らかな触感の商品であり、人気があったのが頷ける。大英帝国当時のイギリスがアジアへの覇権争いに明け暮れていた１７～１８世紀頃、「キャラコ」はイギリスにも東インド会社を通じて大量に輸入されていた。インド産の安価な「キャラコ」に打撃を受けたイギリス国内の毛織物業者は、その輸入を停止することを東インド会社に要望する。それは国民的な議論にも発展し、「キャラコ論争」と呼ばれるほどだった。結局、１７２０年にはキャラコ使用禁止法が制定されたが効果はなく、既存の毛織物業は衰退していった。

産業革命以降、イギリスは綿花をインドから輸入し、綿糸＆綿布に加工することを始めた。産業革命発祥の地・ランカシャー地方のマンチェスターが、綿工業の一大拠点になった。アジアに点在していたイギリスの植民地は、大体が熱帯・亜熱帯に属する地域であり、イギリス国内産業の毛織物商品を衣服として用いていない。綿製品は輸出する商品を余り持たないイギリスの格好の輸出品となった訳だ。また余談ではあるが、アフターヌーンティで有名な紅茶ももとはと言えば茶葉の原産は中国、その後はインドのアッサム地方である。紅茶であればブレンド等の問題があるので『自国へ持ち帰ってお好きにどうぞ』と個人的には言っていられるのだが、コットンに関しては、綿花自体を輸入したインドに

綿布の逆輸入を無理強いしている。機械化によって生産過剰に陥った綿製品をインドに輸出する為に、インド国内の綿織物職人を弾圧するという無謀なことまで行っている。

インドの糸車を回すマハトマ・ガンディーの写真を何度か見たことがある。布を巻き付けただけの粗末な衣服姿。イギリス製品の綿製品を着用せず、伝統的な手法によるインドの綿製品を着用することを強く訴えていたのだ。

イギリスは植民地のインドだけでは綿花供給が不足するようになると、栽培適地のアメリカ南部にその活路を見出した。アフリカからの黒人奴隷の労働力に依存した南部のプランテーションは、１９世紀初頭には消費される８０％の綿花をイギリスにもたらした。青春時代に夢中で読んだ「風と共に去りぬ」の中で南北戦争の悲劇は、強く印象に残っているが、歴史の裏側など当時はまったく何も分かっていなかったのだと痛感している。アメリカ南部からの供給も厳しくなってくると、イギリスはエジプトからの輸入を開始する。コットンはイギリスの資本主義体制の確立に大きな役割を果たし、世界の在り様を大きく変えていった農作物、と言えるのではないだろうか。

③日本の産業革命はいつ？

産業革命以後、イギリスは綿花輸入国から一気に世界最大の綿製品輸出国に転換した。その歴史は明治維新以降の日本にも大きく影響を及ぼすことになる。日本の産業革命は、１９世紀後半からとされているが、イギリスと同じく紡績から始まっている。幕末に島津斉彬が興した集成館事業（日本最初の様式産業群）の一環として、日本初の紡績工場である鹿児島紡績所が設立（１８６７年）されている。一時期、島津斉彬の死去で集成館事業は失速したが、薩英戦争（１８６３年）によりその重要性が再認識され、西洋の新しい技術や機械を積極的に導入することになった。２０１６年６月、世界遺産に登録された「明治日本の産業革命遺産・集成館事業跡」を見学に鹿児島に行った。地元民の「島津斉彬」人気はともかく凄かった。「西郷隆盛」を超えていて、その先見性を誇りにされていた。

明治１１年（１８７８年)、明治政府はイギリスのマンチェスターより紡績機械を輸入して官営紡績所を設立した。イギリスからの綿製品輸入の増大を防ぎ国内綿業を守ることを目的としていた。国内で栽培された綿花を紡績機械にかければ・・・と、政府は簡単に考えていた。しかし、完全に思惑が外れてしまう。マンチェスターで使われていた紡績機械は、インド、アメリカ等で栽培された繊維が長くて細い洋綿の紡績には適していた。日本の風土にあった和綿は繊維が短く粒も小さい。機械にかけるとすぐにちぎれ、和綿を紡績できないことが判明した。武部善人「綿と木綿の歴史」の中に『日本の在来綿は、旧大陸系に属し、苞がモモを包まないで広がっている。(中略) アジアワタは綿毛のいちばん短い、しかも太い系統で機械紡・織にもっとも不適なものである』との記載を確認した。

それでは洋綿種を国内で栽培すれば、ということになり早速着手するが、失敗の連続。要するに洋綿栽培は、湿度の高い日本の風土には合っていなかった。今回の学習でサムライジーンズさんから和綿の種を分けて頂き、自宅で栽培体験をしてみた。和綿の花は斜め上を向いて咲くが、花が枯れた後にできるモモ（コットンボール）は真下を向いて実をつける。苞（つぼみを包んでいた葉）がコットンボールの傘替わりとなり、少々の雨ならボールが弾けた後も防いでくれる、ということが分かった。洋綿の場合、和綿に比べ品種にもよるが１．５倍から２倍の大きさで、コットンボールは上を向いて弾ける。多湿な日本ではすぐに湿気を含み、収穫時期を間違えると貴重な綿花は台無しとなる。このことが失敗の連続に繋がったのでは？と推測する。もっともビニールハウス等も設置でき、亜熱帯の気候に近づきつつある現代の日本では、洋綿栽培も容易になっているとは思うが。

和綿の花

▲和綿のコットンボール

▲和綿のコットンボールが弾けた！

▲洋綿のコットンボール（和綿の２倍）

ここまで学習してきて「和綿」と「洋綿」の違いが、その後のコットンの歴史を大きく動かしたことに正直なところ、複雑な想いを持った。洋綿に比べ、和綿は効率という面では確かに劣る。紡績機械にかかりにくく、収量も少ない。しかし、イギリスと違い日本はコットン栽培ができる風土なのだ。どこでボタンを掛け違って、コットン自給率０％（統計上）の国になってしまったのか？という想いである。

④コットンの歴史の曲がり角

繰り返しの記載になるが明治政府は当初、和綿を原料としてイギリスから輸入した紡績機械で工場生産を行い、外国綿布＆綿糸の「輸入防遏（ぼうあつ）」を成し遂げようとしていた。その目的のために堺・愛知・広島などの江戸時代以来の綿業中心地に、官営紡績所を建設し紡績機械を設置した。和綿はその繊維の短さゆえに紡績機械に適合しなかったことから、官営紡績所は結局民間に払い下げられることになった。綿業の近代化をもくろむ企業家と国内綿業農家の闘いはおよそ１０数年続いたが、時代の波に押される形で、明治２９年（１８９６年）に綿花輸入関税撤廃法が成立した。明治２０年（１８８７年）に栽培面積が１０万ヘクタールだった綿畑は大正１４年（１９２５年）には１３００ヘクタール（数字：「日本綿業発達史」）にまで減少し、綿花栽培は衰退の一途を辿っていった。関税撤廃法施行の明治２９年が、コットンの歴史の曲がり角になったと言える。この事実はコットン学習を開始して、武部善人著「綿と木綿の歴史」を読んだ折に知ることになったが、実に残念で仕方なかった。永原慶二はその著書「苧麻・絹・木綿の社会史」の中で『かつて生産者農民の手に、日本経済史上はじめてといってよい利潤をもたらし、かれらに上昇の夢を与えた近代的綿業は、その使命を終えた。というより近代資本主義的綿業の出発にあたって、完全に圧殺されてしまったという方が正しい』と述べている。

日本の産業革命は綿花を輸入することで急速に発展していく。この構図はイギリスとまったく同じで、幕末に綿布＆綿糸を輸入するばかりであった日本は、明治３２年（１８９９年）には綿糸の輸出額で２.８９０万円を超えている。これは生糸輸出額（６.２５０万円）に次ぐ第２位の数字となっている。当時の総輸出額は、２１.４９３万円であり、１３.３％を占めることになる。ちなみに綿花の輸入額は、６.２１５万円（総輸入額　２２.０４０万円）で第１位となっている。（数字出典は「綿と木綿の歴史」による）

明治３２年とは日清戦争で日本が勝利し、ロシアとの戦いに目が向けられていた年で、兵衣用としても綿布の需要が高まった時代だと思われる。また、明治時代に入ってからの人口増加も綿布の大量需要に拍車をかけた時代だった。そこから３５年経過した昭和９年（１９３４年)、日本はイギリスを抜いて綿布輸出量（２１億平方メートル）が世界第１位になっている。

ここまでイギリスと日本のコットンの歴史を調べてきて、いくつかの類似点に気づいた。綿花を輸入し自国で紡績機械にかけ綿布＆綿糸を大量に輸出したこと、その輸出先は植民地が大半だったこと。近代の日本はイギリスの帝国主義を踏襲して大日本帝国となり、戦争への道を突き進んでいったのかと。ただ日本はイギリスと違って、コットン栽培ができる風土を持っている。綿花輸入関税撤廃法が施行されなかった場合、今の日本はどんな未来を持っていたのか？　タラレバの話ではあるが、見てみたい気がする。

５．フィールドワーク報告

①糸紡ぎ体験（丹波布伝承館）

２０１７年2月１１日、兵庫県庁前から湯村温泉行の高速バスに乗り込み、1時間１０分後に青垣ＩＣで降りた。丁度この日は兵庫県北部に大雪警報が出ていた。バス停留所からすぐ近くにある道の駅・あおがき迄の道も雪で覆われていて、油断していると滑りそうになった。道の駅の敷地内に、今日の目的地の丹波布伝承館がある。この会館で年に数回行われている「糸紡ぎ体験」をする予約を入れていた。１０時から１６時までのコースで前日に確認連絡をいれたところ、３名の予約者がいるとのこと。結局、大雪のため名古屋からの参加者２名は参加できず、私1人がマンツーマンで指導を受けることになった。指導員の大谷とみ江さんのお話によると、丹波布伝承館は今から２０年前（平成１０年）に当時の氷上郡青垣町が丹波布の技術を伝承するために設立した施設とのこと。毎年、伝習生を募集し会館内で糸紡ぎから始まって草木染、機織りまでの技術を教えておられる。大谷さんはその第一期の伝習生であり、現在では、あおがき丹波布工房を主宰する、丹波布作家の第一人者でもある。その時は知らなかったが後で調べて、恐縮することしきりだった。

早速作業室に入ると、まず糸車の真横に座布団を敷いて正座、それぞれの部品の役割から説明を受ける。写真では見たことはあるものの、どういう仕組みでふわふわのワタから糸が紡がれていくのかは知らなかった。糸を巻き取るスピンドルにまず、３０センチくらいの糸を巻き付けて一方の端を左手に乗せたワタにふんわりと置く。右手で糸車を右回転、と同時に左手を後ろへ引いていく。するとなんとビックリ、糸が紡がれていく・・・それを今度は巻き取る作業、今度は糸車を左回転して糸を外しスピンドルの根元２センチの位置に巻き取っていく。簡単に言えばこの連続でワタから糸が紡がれていく。身体の重心は糸車の右回転・停止・左回転を繰り返すことで常に変化するので、正座をしていても足は痛くならない。「コツをつかむまでにかなりの時間がかかりますよ」と言われていた。まったくその通り！スピンドルを見ていると糸車の回転がおろそかになり、糸が紡げずすぐに切れてしまう、左手の引きが早すぎても切れてしまう、右手と左手のバランスのとれた動きが中々取れない、実際苦戦した。結局、お昼休みの１時間を除いての５時間ほどで紡げた糸はわずか６グラムのみ、大谷さんが７～８分ほどで仕上げられた量だった。

『糸紡ぎがすべての基本で、それを疎かにすると次の工程の染色、機織りも失敗する』という言葉が実感できた。『糸を紡いでいると一番気持ちが落ち着く』とお話しされていたのも印象に残った。ひとつかみ６グラムのワタを、一日平均１０個から多い時で２０個くらい糸に紡ぎ、一反（約１キログラム）の分量になるまでに半月から１カ月かかる。それから糸に束ねて草木染作業、気の遠くなるような機織り作業へと続く。丹波布は兵庫県の伝統工芸品、国の無形文化財指定を受けている。それが納得できる作業工程だった。

から糸に束ねて草木染作業、気の遠くなるような機織り作業へと続く。丹波布は兵庫県の伝統工芸品、国の無形文化財指定を受けている。それが納得できる作業工程だった。

丹波布とは、もともと江戸時代後期から明治時代末期までは佐治木綿と呼ばれていた。氷上郡青垣町佐治地域で栽培されていた和綿から紡がれた木綿であったとのこと。昭和初期に民芸家の柳宗悦が京都の東寺の朝市で目にとめ、その由来を調査したことから丹波布と名付けられ、広く世間に知られることになった。しかしながら、当時コットンの栽培は勿論のこと、その技術も伝承されてはいなかった。１９５５年に丹波布復興協会が発足し、地元の足立康子さん（１９２６～２０１４）を中心に、丹波布の復興に取り組んでこられたそうだ。大谷さんはその足立さんに直接指導を受けられている。会館内に足立さんの作品が展示してあったがとても美しい。自宅の蔵から見つかったという天保６年（１８３５年）当時の縞帳から、様々な文様を再現されてきた足立さんならではの作品である。　丹波布伝承館を巣立っていった伝習生は７０名ほど、現在３０名が現役で活躍しているとお聞きした。会館の近くにコットンの栽培地もあり、展示品はその畑からとれたもの。訪問が冬でなく栽培時期ならその畑にも行けたのに、とは思いつつもお話を沢山聞けたので充実したフィールドワークの一日となった。

▼丹波布作品

▼　大谷とみ江さん（指導員）

▼丹波布伝承館（道の駅あおがき内）

② サムライ自家製ジーンズプロジェクト・篠山市真南条

２０１２年３月、篠山市真南条上の圃場で「採れたて一番デニム！サムライ自家製ジーンズプロジェクト」は始動した。真南条営農組合の敷地近くにある、畑２面の広さ合計が４．７５２㎡の休耕田を借り受け、サムライ社員の伊藤さんが地元常駐してのスタート。真南条営農組合はサムライジーンズだけでなく、シルバーカレッジ卒業生のグループ、神戸大学農学部、灘中学校、障害者施設、ふるさと村等々、外部団体からの受け入れを数多く行い、地域の活性化を図っている組合である。丹波黒豆、赤じゃがいもに続くコットン栽培は、営農組合にとっても大きな賭けとなるプロジェクトだった。同組合の酒井顧問は『米作に向かない農地が耕作放棄地になっており、和綿栽培に期待している』と語っている。和綿は軽く、収穫作業は黒豆栽培を引退した高齢者でも容易で、収穫物はすべてサムライジーンズが買い取ってくれるので、このプロジェクトの広がりに期待を寄せている。

２０１３年４月から毎週、米つくろう会の例会で真南条圃場に通うことになった私は、当時『サムライジーンズが１００万円ジーンズを売り出すらしい』という噂話にビックリしたものだ。『１００万円（正式には９９９，９９９円）・・・売れるのか？』という素朴な疑問。前年に収穫できたコットンを地元の障碍者施設で綿繰り（種を取り出す）作業をしてもらい、染色はわざわざ徳島県の阿波藍染問屋に委託し仕上げたジーンズが４着。まさに贅沢の極みの１着。サンテレビの取材番組内で『作り手と穿き手の価値観が一致しないと商品価値がない』とサムライジーンズの野上社長は語っていた。社名にサムライを入れただけあって収穫を多く見込める毛先の長い洋綿でなく、日本在来の和綿栽培に拘った徹底ぶり。数あるジーンズメーカーの中で、色落ち・洗いざらし処理ではなく本来の藍色のジーンズに拘った商品展開は、知る人ぞ知るメーカーであるようだ。

毎年５月の大型連休中に播種、５月末に定植、その後は毎週土曜日に草むしり、１０月に入ると収穫祭と称して「サムライ綿づくり倶楽部」メンバーを集め、地域の住民も巻き込んでイベントは開催される。「サムライ綿づくり倶楽部」はサムライジーンズの関係者やＮＥＴで集めたファンメンバーがほとんど。伊藤さんは地域に溶け込んでいくことをまず重視して動かれている。初めて伊藤さんにお会いした時は、背中まで伸ばした金髪？をポニーテールに結い上げた姿に、正直少し引いた。まあ、見ようによってはサムライの総髪髷にも見えなくもないが。もっとも、野上社長も金髪＆サングラス着用のロックな雰囲気で、本当によくサムライ畑に来て草刈り機を振り回しておられる。

組合の酒井顧問を通して、米つくろう会もイベントにお誘い頂いた。イベント時はランチ付き、午後からは草木染教室、木工教室等、子供たちにも喜ばれるメニューを用意して、年毎に参加者は増え続けていった。その結果、２０１３年からは委託栽培募集も始まり、栽培に参戦する周辺地域の農家さんが二桁になった。マスコミへの登場も数多く、他

年毎に参加者は増え続けていった。その結果、２０１３年からは委託栽培募集も始まり、栽培に参戦する周辺地域の農家さんが二桁になった。マスコミへの登場も数多く、他地域の行政からの視察も相次いでいる。また、篠山市立城南小学校の児童への「服育」にも３年目から取り組んでいて、コットン畑へのご招待、コットンボールから一枚の布にする過程（綿繰り、糸紡ぎ、機織り）のミニ実技授業も抜かりなくこなしておられる。

２０１７年５月７日、以前から面識のあった伊藤さんにお願いして種まきイベントに参加させて頂いた。ついに「サムライ綿づくり倶楽部」の会員番号８８の正式メンバーになってしまった・・・当日は２７名の参加者あり。二か所の畑に施されたマルチの穴に種まき（３粒）をして土をかけていく。翌日は雨の予報なので水やりはしない。土がかなり乾燥していたので大丈夫かと心配になり確認すると『９０％の発芽率、大丈夫』とのこと、余計なお世話だった。コットンは生命力が強い植物なのだと思い至った。また広報担当の荻野さんからは『紡績をお願いしている大正紡績さんから和綿の扱いにくさを指摘されている』とお聞きした。数あるジーンズメーカーでオンリーワンを目指すには「和綿」「有機栽培」を追求していく以外にない、と決断した野上社長の戦略なのだろうと推察した。個人的には篠山が和綿の里にもなってほしい願望があるが、果たしてどうだろうか？

▲播種お手伝い中（5/7）

▲中央が挨拶中の野上社長(5/7)

▲オーバーオール姿が伊藤さん

▲サムライ収穫祭（１１/9）

③ ３６５コットン（サブロクコットン）・西脇市

１９９５年のある日、神戸のオーストラリア領事館駐在員夫人が西脇市を訪問した。『西脇は播州織の産地なのにコットンの花はどこにも咲いていないのね』との夫人の言葉に「エンヤス織布」の遠藤多久雄さんはショックを受けた。　遠藤さんが「大地のぬくもり・コットンボール銀行」を始めることになったキッカケである。コットンボール銀行とはＮＥＴ等で募った会員に綿種を融資（配布）し、収穫時に収穫の半分を返してもらうシステムでコットン通帳も発行する。一時は全国で１４０名を超える会員が集まったそうで「わたわたサミット」等も開催し、全国コットンサミットの先駆けともなった取り組みだった。２０年以上経った現在では、高齢化等による会員減少で会員は１０名程、播州織デザイナーの小野圭耶さんが主宰する「３６５コットン」に実質引き継がれている。

【２．衣服の国内自給率の話】の項で「３６５コットン」に少し触れているが、前述のセミナー以降、彼女のその後の活動を知りたくてフェイスブックで時折、活動内容を確認するようになった。彼女自身、播州織の地元・西脇市内の製織会社から染色会社へとキャリアアップの為、勤務先は変わったものの、ＪＲ日本へそ公園の近くの休耕田（西脇市上比延町）で地元の仲間たちとコットン栽培を続けている。拠点となる場所は、メンバーの一人の村田裕樹さんが、借りて住んでいる「コットンハウス」と名付けられた農家の一軒家。村田さんは東京出身の播州織元のデザイナーで、大学在学中に今の勤務先の社長ブログを閲覧し、『ここなら自分の思うような仕事が出来そうだ』と社長に入社を直談判したという経歴の持ち主。彼の直観は当たっていて、現在は「hatsutoki」というブランドの中心メンバーとして充実したデザイナー生活を送っている。「３６５コットン」メンバーの多くは２０～３０代が中心の若者集団でアパレル関係者が多い。

２０１７年5月１４日の種まきイベント開催をフェイスブックで知り、小野さんに参加希望を伝えていた。自宅を早朝出発し午前９時すぎにＪＲ日本へそ公園に到着。目的地はそこから歩いて２０分、グーグルマップで確認していたので迷うことはなかった。「コットンハウス」に到着してみると、若い女性４名が座敷に綿繰り機（綿と種を分ける道具）を持ち出して、今日植え付けるコットン種の綿繰りの真最中だった。早速体験させてもらう。私が担当したのはアメリカ産のシーアイランド（海島綿）種で毛足の長い品種、ようやくコツをつかんだと思ったら終了。その他に緑色のペルー綿、茶色の丹波綿の３種類だった。実際に黒マルチに穴をあけて三本指を突っ込み、３粒ずつ種まきした。結局、合計２２種類に及んだ。オーストラリア白・茶、スーピマ、天竺、高麗、タイ、インド、新疆、天竺、大島、河内、弓ヶ浜等々、多品種少量生産だな？と感じた。耕作地は「コットンハウス」の横の畑と、歩いて２～３分の畑の２か所。広さは合計で１反もないくらいだろうか。一番の耕作面積を占めていたのは、オーストラリア白の種。当日は、コットンボール銀行主宰者の遠藤さんの指示のもと、作業を行ったので何かしら因縁を感じた。

宰者の遠藤さんの指示のもと、作業を行ったので何かしら因縁を感じた。

イベントに集まったメンバーは、子供たちも入れると４３名になってとてもにぎやか。西脇北高校の先生と生徒、コットンボール銀行スタッフ、大阪・奈良・堺のアパレル関係者とその家族、幼い子供たちも沢山、地元の学校教師、ご近所の農家の方等々、多種多様な人たちが集まり、イベント後のＢＢＱが始まった。本日のメーン食材は播州百日鶏なのだそうで、イベント後の懇親会を楽しみに参加するメンバーも多いとのこと。子供たちは近くの竹林でタケノコ掘りに余念がなく、道具もないのに上手に掘り返している。小野さんは「３６５コットン」の意義を問われると「服育」という言葉を使われる。『子供たちに服は畑からできている！？』を伝えたいそうだ。３６５日、一年、毎日、身の回りの出来事を実感しながら生きるような生活が、豊かな生活・・・と彼女は考えている。

播州織はシャツの産地として有名だが、ファストファッションの１．９８０円のシャツと播州織の１９．８００円のシャツ、出来るまでの過程は同じでも、どこ（国）で作るかによって値段は大きく変わる、それをまず知ってほしい。服というものとの関わり方を一緒に考える機会を提供するのが「３６５コットン」の役割と彼女は語っていた。

▲綿繰り作業

▲種まき作業中

▲４３名全員集合！（一番右が小野圭耶さん）

④ かこっとんファームプロジェクト・加古川市

「かこっとんファーム」とは、加古川市内にある「志方東営農組合」の圃場にあるオーガニックコットン畑のことである。このプロジェクトは、志方町高畑に本社のあるワシオ㈱がコットン種を提供し、営農組合が栽培サポートを行い、収穫した綿花を兵庫県靴下工業組合が買い取って高級靴下を作るというシステム。ワシオ㈱は創業６０年になる靴下メーカーであり、鷲尾社長は県下の２９社で組織される兵庫県靴下工業組合の理事長も兼務されていて、このプロジェクトの為に「かこっとん㈱」という別会社まで設立しその社長に就任された。加古川は日本の三大靴下産地のひとつに数えられるそうだ。ちなみにあと２か所は、奈良と東京。またプロジェクトの目的であるが、ワシオ㈱にとっては１００％メイドインジャパン製・靴下及び肌着作りへの壮大な実験。営農組合にとっては、地域の活性化と休耕田＆耕作放棄地の活用。また加古川市にとっては、地方創生事業の目玉！と位置付けられた取り組みである。サムライジーンズと真南条営農組合の取り組みに似通っているが、行政の全面バックアップを得ているところが大きく異なっている。

２０１７年6月１７日、ＪＲ宝殿駅から神姫バスに乗り換え、終点の細工所北口バス停で降りた。志方東営農組合のホームページで綿人（わたびと・コットン栽培のワークショップ参加希望者）を募っていたので事前に申し込んでいた。綿人は加古川市民だけでなく広くコットン栽培に興味のある人なら、神戸市民でもＯＫと言われて安心して参加した。ワークショップの会場は下車したバス停から歩いて７分、大沢公会堂と名付けられた地域の公民館だった。４月から翌年の３月まで毎月第３土曜日がコットンの日と決められていて、５月２０日には大沢公会堂のすぐ近くの畑で播種イベントが行われた。２反程の畑に長綿のセルベス種、カルボニア種を５０名の参加者で植え付けた。一か月後、種は無事発芽し、３０ｃｍばかりの高さにすくすく成長していた。自宅のベランダで栽培中の和綿と高さがかなり違うと少しガックリ、さすが長綿（洋綿）である。６月のイベント内容は、郷土史家・飯沼博一氏による「志方東地域の歴史を学ぼう」セミナーの受講。江戸時代の綿花栽培の歴史を知ることができると楽しみに聞きに行った。

飯沼氏の話によると、あたり一面、田園風景が広がる志方東地区であるが、江戸時代は貧しい農村だったと推定できるそうだ。四方を山に囲まれたこの地域は焼き畑農法が中心で近くを流れる法華山谷川の川筋変更問題等で砂地が多く、米作に適さない畑が多かったとみられる。確かに大沢公会堂までの僅かな道のりでも焼き畑を何か所も見かけた。セミナー終了後、黒田営農組合長は『志方町でも東地区と他地域では農法が違う』と仰っていた。米作に適さない畑で、綿作は広く行われていた筈である。江戸時代後期、姫路藩の家老である河合道臣が市川、加古川流域で広く栽培されていた特産品の姫路木綿で藩財政を立て直したのは有名な話。大坂商人を通さず専売制にすることで江戸に直接売り込むこと

に成功し、色が白く薄地の姫路木綿は「姫玉」・「玉川晒」と呼ばれ好評を博したそうだ。しかし、飯沼氏は志方東地区が姫路藩の領内ではなく幕府直轄領であったと指摘されている。幕府御三卿・一橋領（天領）として幕末を迎えている。営農組合長、加古川市の地域振興課長の方々がセミナー終了後に意外だったと感想を述べられていた。プロジェクトのＨＰにも木綿は、歴史的背景としては姫路藩の特産品という扱いになっている。ただ江戸で姫路木綿の評価が上がることで、志方東地区の木綿も大坂商人に高く買われたそうだ。ここで言う志方東地区とは、大沢、行常、細工所、野尻新、岡、柏尾、吉弘、高畑、大宗のかつての９ケ村のことである。また天領であるため管理する武士が少なく、流通に融通が利いた面も幸いしたと思われる。それに後日、兵庫県靴下工業組合のＨＰを確認したところ、一橋家の下級武士が靴下（足袋ではない）を編む内職をしていたという記載があった。靴下の三大産地のひとつが加古川である事実、これは単なる偶然だろうか？　実に面白い！　ともかく新しい発見のあったセミナーだった。

２０１３年から開始されたこのプロジェクト、取り組みのキッカケとして　①加古川の地がかつて有名な綿花栽培をしていた事実　②２０１０年にコットンの国際相場が高騰したこと　②オーガニックコットンが市場に認知されてきたこと　③地産地消の付加価値のある商品を製造できること・・・を挙げているが、採算ベースに乗せるまでの道のりは決して平坦ではない。今後の動向を追いかけていきたいプロジェクトのひとつである。

▲カルボニア種　種まき中（5/20）

▲セルベス種　７月の畑

▲かこっとんプロジェクト展示

▲セルベス種　収穫時（11/18）

⑤福島オーガニックコットンプロジェクト・福島県いわき市

２０１７年１１月４日（土曜日）エコツアーを主催する（有）リボーンの「パタゴニア・大地を守る会と行くオーガニックコットン収穫ツアー」に参加した。東京駅に７：１５集合だったので、前日から東京に入った。行先は勿論、福島県いわき市にある福島オーガニックコットンプロジェクトの圃場である。参加者はアウトドアメーカーの「パタゴニア」と、有機野菜や自然食品を宅配する企業「大地を守る会」の関係者がかなり多いだろうとは予想していたが、総勢４５名中、２３名は「パタゴニア」の社員、１２名は「大地を守る会」の関係者、残り８名が一般からの参加者という構成で少しビックリ！　今回は収穫ツアーだったが、５月の植え付けツアー、除草ツアーと継続して参加されている方が多く、収穫のみ行くのは何となく居心地悪い雰囲気ではあるが、そこは神戸からの参加ということでスルー。パタゴニア社員さんはスポーツで日焼けした元気な若者が多く、自発的に参加したメンバーが殆どということ。ちなみに同社の日本支社長も参加されていた。

地元いわき市で１９９０年から古着回収活動を始めた、ＮＰＯ法人ザ・ピープルの吉田恵美子理事長にともかくもお会いしたかった。彼女が東日本大震災後まず立ち上げたのが「福島オーガニックコットンプロジェクト」である。津波に襲われた畑に、放射能汚染による風評被害を受けて耕作放棄した畑に福島復興のシンボルとして「オーガニックコットン」を育ててみませんか？と地元の農家さんに語り続けた彼女は、笑顔の素敵なとても明るい女性だった。天ぷらバス（廃油を利用したカーボンオフセットのバス）に乗車、車中ではＤＶＤ鑑賞・他己紹介（隣の席の人をお互い紹介しあう）しながら予定の１０：３０には、いわき市のコットン圃場に到着。バスが到着する前から大きく手を振って出迎えてくれる彼女を発見した。

最初に訪問したのは、夏井ファーム（いわき市平下大越南横手）、３反の広さの圃場に通称チャツネと呼ばれる備中産の茶綿を栽培している。こちらの圃場は海岸線から５００ｍ位しか離れておらず、東日本大震災の折には津波被害を受けている。但し海岸線に沿って昔からの松林があった為、畑はすべて海水を被ったものの家屋は床上浸水程度に収まったとのこと。現在では政府の復興支援策により畑は１ｍ程嵩上げされ、海水による塩害は最小限に食い止められたそうだ。夏井ファームの経営者である小林さんご夫妻のお話しでは、２０１１年２月に有機ＪＡＳ認定が下り、これから本格的に有機野菜栽培に取り組もうとしていた矢先の震災で相当に心労があったとのこと。原発の風評被害で精神的にも追い詰められていた時に、オーガニックコットン栽培の話があり『とりあえず何かを始めなければ・・・』という想いで米作用の圃場にコットン種を蒔かれた。その後、災害ボランティアで、いわき市に入った「大地を守る会」メンバーと出会うことになり、現在では栽培された有機野菜を「大地を守る会」にすべて買い取ってもらっているそうだ。

▲いわき夏井ふぁーむ・全員集合

▲右：吉田理事長・左：小林さん

▲小林夫妻手作りの自給自足ランチ

今年のコットンボールは台風に相当痛めつけられ、出来は良くない。昨年の半分にも満たない量の収穫となっている。それでも参加したメンバーは嬉々として収穫作業を続け、１２時前にはすっかり終えてしまった。昼食は圃場の近くにある小林さんの自宅でお世話になった。近くを流れる夏井川には鮭が遡上するそうで、漁業権を持つ小林さんが釣り上げた鮭のイクラ丼、わかめのお吸い物、冬瓜の煮物、柿のデザートを美味しく頂いた。

小林ご夫妻に盛大に見送られて次に向かったのは、いわき市小名浜野田にある仲野愛子さんのコットン圃場。こちらでは白い会津綿と茶のアップランド綿（アメリカ産）の２種を栽培されていた。アップランド綿は今年初めて挑戦したとのこと。吉田理事長のお話では和綿は繊維が短く紡績機にかかりにくい為、毛足の長いアップランド綿を栽培して混綿

して紡績することにしたそうだ。和綿と洋綿の大きさの違いは一目瞭然、やはり事業者としては経済効率を無視できなかったということだろう。この圃場は「パタゴニア」一社の協力圃場でもある。吉田理事長と「パタゴニア」の繋がりは、移動のバス車中でお聞きした。古着回収をしているＮＰＯ法人ザ・ピープルは、常に大量の古着ストックを抱えている。震災時に災害支援の一環で古着提供をすることになった時、同じく災害支援で衣服提供を申し出ていた「パタゴニア」と協力することになった。それ以来のお付き合いとのこと。「パタゴニア」は１９７０年にアメリカで創設されたアウトドアメーカーである。
環境保護活動にとても熱心で繊維リサイクル、オーガニックコットン問題にも全社挙げて取り組まれている。このツアーに参加されていた辻井支社長が、昼食時に自社製品のマイ箸＆スプーンセットを持ち出されたのには驚いた。とにかく徹底している。吉田理事長のオーガニックコットンプロジェクト構想にすぐ協力を申し出られて現在に至っている。

▲仲野圃場（小名浜野田）で説明中の吉田理事長

収穫を終えた頃、畑の所有者である仲野愛子さんが大量の柿を持ってこられ参加者に配り始めた。とても元気のよいシルバー女性である。『ついでにサツマイモも掘り起こして持って帰って～』との言葉に皆さん大喜び、次はサツマイモ収穫体験となった。

２０１２年、吉田理事長はＮＰＯ法人ザ・ピープルのみに留まらず、地元のＮＰＯ仲間と協働して「いわきおてんとＳＵＮ企業組合」を立ち上げた。太陽光発電事業を地元で展開していた島村守彦さん、湯本温泉古滝屋の当主でもあり復興スタディツアー主催者でもある里見喜生さんとともに、長期的な視野に立って活動されている。「衣」の問題だけでなく、「エネルギー」「震災復興」を市民レベルで解決していこうという強い意志を感じる。
来年のコットンの栽培予定地に、原発２０キロ圏内に当たる広野町が入ったとお聞きした。

除染完了したとされる原発近くの圃場に、徐々にその範囲を広げていこうとされている。４月にクリーンアースグループのフィールドワークで訪れた原発近くの地域は、除染土の入ったフレコンパックの山だらけで無機質なイメージだった。原発事故後、完全な耕作放棄地となってしまった圃場には、当然農作物の姿はない。その耕作放棄地でまずコットンを栽培する。原発５０キロ圏内のいわき市内の圃場で栽培されたコットンは「放射性物質不検出」という結果が既に出ていて、農作物に比べ土壌からコットンへの放射性物質の移行係数は非常に低いとされているが、原発２０キロ圏内の広野町ではどうだろうか？　正直なところ、私自身には手放しで賛同できない想いがある。

① 繊維となる作物、綿花の栽培を通して農業の再生にひとつの道筋を示したい。
② 環境に配慮した有機農法を選択することで本物を生み出したい。
③ 地域内外の多くの人々の応援を得ることで福島の農業を支える仲間を増やしたい。
④ 新たな繊維産業をこの福島の地から創出したい。

以上４点が「いわきおてんとＳＵＮ企業組合」を立ち上げたときの吉田理事長の目標である。震災後、彼女の八面六臂の活躍により「福島オーガニックコットンプロジェクト」は「グッドライフアワード２０１５環境大臣賞　優秀賞」を受賞した。何年後、何十年後に私の危惧が杞憂に終わることを切に願っている。彼女の地元福島への熱い想いを本当に応援していきたい。いわき市の観光＆物産基地である「いわき・ら・ら・ミュウ」でツアーメンバー見送りの折、吉田理事長も１１月１８日加古川で開催される「全国コットンサミット」に参加されることを確認した。どうも再びのご縁があるようだ。

▲吉田理事長と私（いわき・ら・ら・ミュウにて）

⑥ 全国コットンサミット・加古川市

全国コットンサミット・・・最近のコットン栽培事情をご存じない方にとってみれば、『なに、それ～？』と言われかねない言葉だろう。２０１１年３月１１日に東日本大震災があり、東北沿岸部は軒並み津波被害を被った。海水で洗われた農作地には塩分が残り、土壌改良しなければかつての農耕地に戻せない状況に陥った。アパレル業界でもどういった支援が一番効果的かを話し合われる中、以前からオーガニックコットン製品に移行しようとしていた数社（リー・ジャパン、クルック、ユナイテッドアローズ等）が災害地への継続的な支援策を模索していた。支援検討会の席上「コットンは塩害に強い」という、大正紡績㈱の近藤健一氏のひとことで、全国コットンサミットの先駆けとなる「東北コットンプロジェクト」は始動した。

『コットン種を植えて除塩しましょう』いう呼びかけに応じたのは、宮城県名取市の（有）耕谷アグリサービスという農業法人と荒浜地区に畑を持つ農業従事者たち。世界のコットン栽培地を知り尽くしているコットンマスターの近藤氏は、栽培指導を担当し震災年の６月には最初の種まきを行っている。初年度は、作付面積１６０アール・年度収穫量１１０ｋｇで一応の成功を収めた。種まき、除草、収穫等にはアパレルメーカー関係者他沢山のボランティアが駆け付けた。現在も継続的な支援は行われている。収穫した綿花を買い取るという支援も勿論継続されている。政府の復興支援策で農地の嵩上げが行なわれたこともあり、元の稲作に戻した農家さんもいて、２０１６年度、作付面積１８０アールと２０１１年とそれほど変化はないが、年度収穫量が当初の１０倍となっている。

収穫量増大の立役者は（有）耕谷アグリサービスの佐々木和也さん。『僕が農業に対して考えるのは、生きる上で一番大事な仕事』と語る彼は、震災時２５歳の青年でコットン栽培担当になった。徹底した観察、研究、実践で手をかけず、コストを下げて、収穫を増やす努力を続けている。２０１６年度、６０アールで５００ｋｇを超える収穫量は１０アールあたり１００ｋｇというコットン産地化への目標をほぼ達成できる数字であり、個々の繊維長が平均より長い出来栄えになったとのこと。

▲２０１７年１１月　名取コットン圃場

▲アカラ種（洋綿）繊維なが～い！

この東北コットンプロジェクトを契機に「全国コットンサミット」が毎年開催されることになった。コットンマスターの近藤氏が提唱し、国内でのオーガニックコットン栽培に弾みをつける目的でサミット企画を仲間と立ち上げた。その実行委員会事務局は大正紡績㈱内にあり、実行委員長は近藤氏が兼務されている。２０１１年・岸和田（河内木綿）、２０１２年・境港（伯州綿）、２０１３年・奈良県広陵町（大和木綿）、２０１４年・愛知県蒲郡（三河木綿）、２０１５年・開催地決まらず開催なし、２０１６年・信州高山・・と続き、２０１７年は加古川（播州木綿）開催となった。

１１月１８日（土曜日）のサミット当日、午前中は加古川市志方東営農組合主催のイベントに参加した。何度か通った大沢公会堂近くのコットン圃場で雨の中、綿摘み作業を行った。ふわふわのコットンが雨に濡れてなんだか可哀そう・・・後で乾燥機にかけるそうなので黙々と収穫した。次に１０：１５～１０：４５までは、加古川出身の講談師・旭堂南海さんの「加古川こっとん物語～志方はしたたか生き残る～」講談を拝聴。実際面白かったし、数々の発見があった。志方東地区で栽培された木綿は東郷の長束木綿であり、後に姫路木綿もしくは播州木綿と呼ばれることになったこと。東郷地区とは現在の加古川市、高砂市、稲美町、播磨町の２市２町のこと。志方町は江戸時代、姫路藩と一橋領で分割されているので、その流通の経路がいまひとつ不明確だった。江戸で流通し評判を呼んだのが姫路藩経由、その評判で大坂商人に流通したのが一橋領経由ということらしい。姫路藩はこの長束木綿で借金完済を果たしている。また、江戸時代の志方町では姫路藩の行った大規模経営でなく、家内生産で小規模に栽培を行っていたため、明治時代に入っても細々と栽培は続けられたそうだ。志方はしたたか生き残る・・・である。

▲雨の中、綿摘み作業

▲旭堂南海さんの講談

午後から加古川市民会館でサミットイベント本番が予定されていた。顔見知りになっていた加古川市の農林水産課の職員さんに「市民会館行のマイクロバスに乗せてほしい」とお願いしてみると快くOKしてもらった。全国から来られた視察者用のマイクロバスである。バスに乗り込み市民会館までの２０分間、どういうわけか同乗者と話が弾んだ。
福島、境港からの視察者が多かった。いわき市のNPO法人ザ・ピープルさんも来られてい

たが、吉田理事長は市民会館待機とのことだった。福島県の「棉の里」代表には良いお話しをお伺いできた。会津初代藩主・保科正之が綿の栽培を奨励し会津木綿が生まれたこと、会津は木綿産地の北限であること、茶綿が遺伝的には優性であること等々、お話が面白く勉強になるなぁ～と思っているうちに市民会館に到着してしまった。

▲加古川市民会館会場前

▲会場内で糸紡ぎ体験ができる！

サミット本番は１３時からなので、各種展示会場となっている加古川市民会館の小ホールは準備の真最中。ＮＰＯ法人ザ・ピープルの吉田理事長を始め、ワシオ㈱の鷲尾社長、見知った方たちが沢山いた。大ホールの受付横では糸紡ぎ体験、綿繰り体験ができるようになっていた。糸紡ぎ機がすべて古いので、「播磨の木綿を復活させる会」の吉田ふみゑさんにお聞きすると『農家の蔵から出てきたのを修理したものばかり』とのことだった。
吉田さんは「丹波布に魅せられたひと」の作者である。私自身が一番気になった展示は加古川幼稚園と西神吉小学校の子ども達による作品の数々、とても温かみがある。

▲コットンを使ったクリスマスリース

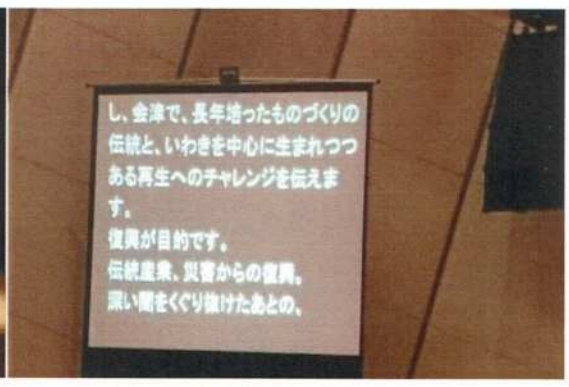
▲西神吉小学校児童作品

全国コットンサミット in 加古川の実行委員長・釜谷氏（釜谷紙業㈱社長）の開会宣言でプログラムは始まった。歌手・八神純子さんの基調講演＆歌唱、丹波布のわたばな工房を主宰する藤原晶子さんの講演の次が、一番期待していた全国コットンサミット実行委員会の近藤会長と加古川市の岡田市長との対談。東北コットンプロジェクトを企画・指導したコットンマスターは何を語るのか？と興味津々だった。近藤会長とオーガニックコットンとの出会いは、アメリカの昆虫学者であるサリー・フォックス女史の書いた記事に始まる。彼女は『オーガニックで農作物を作らないと世界がおかしくなる』を言い始めた人物。記事の中で彼女はコットン栽培の時に蒔かれる大量の枯葉剤や農薬でカリフォルニアは砂漠化していき、やがて人が住めない世界になると警告している。それを詳しく調査した結果、彼女に賛同していくことが地球環境を守ることにつながると確信したそうだ。近藤氏は現在、大正紡績㈱取締役営業部長として世界１９７か国のコットン栽培地で、オーガニックコットン栽培を強く推進している。

インドではオーガニック栽培に変えたことで収入は２倍になり、健康にも良い影響がでているそうだ。コットン栽培時の農薬使用量のことは日本綿業振興会のホームページで少し学んでいた。２５年前まで世界の農薬販売量の２５％はコットン栽培に使われていたこと、２００７年には6.8%まで減ってきていること、ただこれは米国農務省のデータである。『オーガニックコットン製品は価格が高いと言われるが、栽培量を増やしていけばどんどん安くなる』とも、『これからはエシカルな視点でファッションも考えてほしい』とも仰っていた。かこっとんプロジェクトのオーガニックコットン製靴下（一足５千円）を履いた岡田市長に対し、近藤会長は全身ほぼオーガニックファッションで統一しているそうだ。健康に良いし着心地は抜群と自慢気だった。

対談のあと午前中にも拝聴した旭堂南海さんの創作講談「加古川こっとん物語～姫路藩の借金を返した加古川木綿～」があり、最後は大会旗の引き継ぎ式が行われた。来年のサミット開催地は福島に決定している。福島オーガニックコットンプロジェクトの吉田恵美子理事長の登壇となる。２０１８年、また福島に行きたいと思いながら会場を後にした。

▲左から二人目が吉田理事長



▲吉田理事長挨拶（復興が目的です）

５．まとめ

２０１６年の４月にＳＧＳに入学し、学習テーマを９月までに決定する旨の要請があったが、頭の中では既に「コットン」と思っていた。色々調べていくうちにコットンの播種は５月が一般的で９月～１１月にコットンボールが弾け、収穫時期となることでフィールドワークは２０１７年にした方が良さそうだと気づいた。結果、学習１年目は図書館に足を運び資料調査することにして、２年目にフィールドワークに出ようと決めた。実際に栽培体験もしたいと思い、フィールドワークでも訪れたサムライジーンズの和綿（白色）とアメリカ産の洋綿（茶色）の種の２種類を入手した。自宅ベランダと私が所属している「米つくろう会」の会員である岡部京子さんの圃場で栽培させていただくことになった。この栽培期間の数カ月は、とても興味深い貴重な体験になった。

＊＊＊

【自宅ベランダ栽培　　５月１０日播種からコットンボールが弾けるまで】

▲６月７日（発芽）▲７月８日（成長）　▲７月１８日（開花）　▲８月３０日

＊＊＊

【岡部さんの圃場のコットン栽培】

▲８月８日（播種は５月１６日）

▲８月２２日（コットンボール沢山）

▲９月１５日（サムライジーンズ・白和綿）　▲９月１５日（アメリカ産・茶洋綿）

＊＊

栽培をささやかに経験して想うことは、昔の人たちは一枚の衣服を手に入れる為に、気の長い努力をして身を惜しまず働いたということ。糸に紡ぎ、一枚の布に機織りし、縫製して・・・当時はそれが当然であったとはいえ、この過程を現代の子ども達に伝えていく必要はあると思った。１９９０年代以降、ユニクロに代表されるファストファッションが誕生して、「服は安価なもの、どこにでもあるもの」に衣服の価値観は変わってしまった現代だからこそ、子供たちに伝える必要があると痛感した。３６５コットン（サブロクコットン）の小野さんの語る服育が、栽培体験を通してより一層理解できる気がした。

【１．はじめに】の項で、フィールドワーク先のサムライジーンズと福島オーガニックコットンプロジェクトを主宰するＮＰＯ法人ザ・ピープルは、何故オーガニックコットン栽培を選んだかについて疑問を呈している。これについては、各フィールドワーク報告内容に記載済みであるが、一応の理解に留まっている気がずっとしていた。その為、何かの参考にでもなればと２０１７年６月２４日に、神戸ファッション美術館・服飾セミナー「大量生産を超え、クリエイターが出来ること」講師：阪急うめだ本店営業統括部長・宇野新治氏の話を聞きに行ってみることにした。宇野氏は今評判の「うめだスーク」を立ち上げた人物である。「うめだスーク」とは百貨店１０階にある個人出店できる区画の売り場のことで、個性のある商品の数々が人気の場所。

まず語られたのは『２０１０年の人口ピークを境に人口減少が始まっている、時代が大きく変わる潮目にきている、モノが売れない時代がやってくる』いう内容。『惚れ込んで購入するというライブ感』『どこにもないモノ・気合を入れたモノ』に消費者は価値を見出すようになってくると、百貨店関係者は予想している。エルメスのスカーフが高額にもかかわらず売れ続けるのは、１枚毎の製作工程がとても手間のかかるものであり、希少性が高いからが理由であるように。サムライジーンズの取り組み、また「かこっとんファームプロジェクト」のオーガニックコットン靴下づくりの取り組みの意味は、このあたりにヒントがありそうだ。

現在、立ち上がっている全国のコットンプロジェクトの多くが、２０１１年の東日本大震災以降に計画されたもので、時代の変化を先取りしたプロジェクトになっている。様々な意味で２０１１年は、時代が大きく変わる潮目であったのは事実のようだ。
「エシカル」という言葉が最近よく聞かれるようになってきた。「エシカル」とは道徳的とか倫理的という意味であるが、では「エシカルファッション」というと首をかしげる。NET 検索してみると、「環境問題、労働問題、社会問題に配慮した、良識にかなった素材の選定や購入、生産、販売をしているファッション」と出てくる。全国コットンサミット実行委員長の近藤氏も『エシカルな視点でファッションも考えてほしい』と加古川市長との対談で仰っていた。オーガニックコットンは、エシカルファッションのもっとも象徴的な素材に該当する。多くのアパレルメーカーが関係している全国コットンサミット委員会の役割は、日本のファッション業界をエシカルな方向に導いていく役割も担っているだろう。また、積極的にエシカルファッションへと方向転換させようという意図も感じる。

長田華子著「９９０円のジーンズがつくられるのはなぜ？ファストファッションの工場で起こっていること」の中で著者は、その９９０円ジーンズは、『農薬漬けで栽培されたコットン生地、縫製工場であるバングラデシュ国内の劣悪な労働条件の中で縫製された』と指摘している。このジーンズはユニクロの第２ブランドであるジーユー（GU）で２００９年３月に発売され爆発的にヒットした商品だった。著者は茨城大学の准教授でバングラデシュに実際に取材に赴き、縫製工場の女性従業員と偶然知り合いになったことから著作内容の事実を知ることになった。９９０円ジーンズは、「エシカル」という言葉の「環境問題、労働問題、社会問題に配慮した云々」という具体的な内容とは真逆の商品になると言える。つまりファストファッションブランドの提供するファッションは、エシカルファッションではありえないことになる。

「ファストファッション」と「エシカルファッション」これから時代はどちらに傾いていくのか？予想は難しい。自分自身のことを考えてみても、ユニクロは実に痒いところに手が届くメーカーなのだ、手頃な値段でファッション性ある製品が提供され、不要になると店頭にある回収ボックスに入れることで良心は痛まない。その古着は途上国に送られる筈であるし・・・と思っていたが、福島へのフィールドワークでお会いしたパタゴニアの辻井支社長の『途上国も最近は自国の産業保護の為、古着の輸入を禁止している。ユニクロは回収古着の大半を廃棄している』発言が気にかかるが。衣服の国内自給率のことを考えてみても、確かにファストファッションが出始めた頃から急激に自給率は下がっている。日本経済新聞２０１７年６月３日付記事によると『日本化学繊維協会がまとめる「繊維ハンドブック」によると、日本で流通する衣料品の国産比率は 2016 年で 2.7%だった。50%あった 1990 年代初めから急低下した。』とある。今や売上高世界第３位のアパレルメーカーとなったユニクロの成長力は驚異だが、大量生産大量廃棄の時代はそろそろ終焉を

迎えるべき時が来ていると考える。その為には私たち消費者が賢明になる必要がある。

「衣食住」という言葉の最初に登場する「衣」は、何故「食」の前にあるのか？疑問だった。田畑健著「ワタが世界を変える」の中で『衣食住のうち、食と住は人間にも動物にも共通するが、衣服をまとわなければ生きていけないのは人間だけ。衣は寒さから身を守る役目もあるが、その人の考えや行動を表し地位も表す。その人の生き方が込められている』の文面に深く納得した。コットン栽培はかつて日本の農業の重要な部分を占めていた。コットンマスターの近藤氏が語られたように『衣食くらい国内で自給できる国であってもらいたい』と学習を通して改めて実感している。

6．おわりに

本稿を終えるにあたって個人での学習であったとは言え、私の所属する「米つくろう会」メンバーの支援がなければ続かなかったと実感している。柚耶の郷圃場の一角にある岡部さんの圃場でコットン栽培をはじめて経験したこと。定例日の火曜日しか圃場には立ち寄らない私に代わって、コットン畑にも水やりしてくださり成長を見守っていただいたこと。「米つくろう会」の皆様、特に岡部さんには本当に感謝している。岡部さんは地元の小学校（つつじヶ丘小学校）で様々なボランティアをされている方である。村尾代表とともに田植えのシーズンには苗を持参して、小学校の庭に設置された簡易水田？で小学生たちに田植えを指導されたり、柚耶の郷圃場に校外学習でやってくる児童の生き物調査に協力されたり…今回のコットン栽培の件もあまりに私がコットン～と騒いでいたせいか、つつじヶ丘小学校の校庭にも種まきしてくださった。

収穫したコットンで児童たちとコースターを作るのはどうか？と提案したまでは良かったが、コットンを収穫後に綿繰り（種を取り出し）、綿打ち（綿をほぐす作業）が終わった段階になって、丹波布伝承館で「糸紡ぎ体験」に挫折したことが頭をよぎる。簡単にはできない！　岡部さん、加古川の実家の蔵から年季の入った糸紡ぎ機を持ち帰ってこられた。「全国コットンサミットＩＮ加古川」イベントに参加され、糸紡ぎ機を修理する手筈をつけられた、ヤル気！　あまり想像したくないが、近い将来に糸紡ぎ機相手に悪戦苦闘している自分の姿が目に浮かぶ。

３６５コットンの小野さん、ＮＰＯ法人ザ・ピープルの吉田理事長とは、ＳＮＳで今後ともコミュニケーションをとっていくことになるだろう。心残りは、宮城県名取市にある（有）耕谷アグリサービスのコットン圃場に、日程の都合でフィールドワークに行けなかったこと。またの機会、仙台への旅行を計画して訪れるつもりにしている。

７．参考文献

① 武部　善人　「綿と木綿の歴史」　御茶ノ水書房　　１９８９年

② 武部　善人　「日本木綿史の研究」　吉川弘文館　　１９８５年

③ 田中　優子　「布のちから」　朝日新聞社　　２０１０年

④ 田畑　健　　「ワタが世界を変える」　地湧社　　２０１５年

⑤ 永原慶二　「苧麻・絹・木綿の社会史」　吉川弘文館　２００４年

⑥ 中谷　比佐子　「きものという農業」　　三五館　　２００７年

⑦ 福井　貞子　ものと人間の文化史９３「木綿口伝」法政大学出版局　２０００年

⑧　　〃　　〃　１４７「木綿再生」　〃　　２００９年

⑨ 三瓶　孝子　　「日本綿業発達史」　　岩崎書店　　１９４７年

⑩ 宮川　真紀「東北コットンプロジェクト・綿と東北と私たちと」タバブックス　２０１４年

⑪ 柳田　国男　　「木綿以前の事」　　岩波文庫　　１９７９年

⑫ 横井　雄一　　「紡績・日本の綿業」　岩波新書　　１９５５年

⑬ 吉田ふみゑ　　「丹波布に魅せられたひと」　北星社　　２０１２年

⑭ 長田華子　「９９０円のジーンズがつくられるのはなぜ？　　２０１６年

ファストファッションの工場で起こっていること」

合同出版